最近五十年支那學界の回顧（四）

アンリ・マスペロ
內藤耕次郎
內藤戊申　共譯

四、蒙古帝國と元朝①

蒙古時代は極東と西洋との間の複雜な關係の爲に、非常に多くの學者の興味の對象となつた時代である。この時代の史料は、それ以前の時代のそれとは大に趣を異にして居て、支那人の著述では不充分なので、あらゆる方面の歷史家、就中回教徒の歷史家をも之に參加させなければならない。實際の所、蒙古帝國に關する我々の智識は主としてこれ等の歷史家から得たものである。Rachid-ed-din, Aboul-Ghazi, Khondémir, Nessawi 等がそれであつて、かの d'Ohsson の蒙古史（l'Histoire des Mongols depuis Tchinguiz-Khan jusqu'à Timour bey ou Tamerlan, 1852）は之等をその根本資料として居る。支那の記錄は、②Pelliot 氏が Marquart 氏の著述に關してはつきり指摘した如く、一度之を組織的に研究するときは訂正を餘儀なくされる點が若干あるであらうと思はれる。

註

①回教徒、印度及び歐洲中世の研究に屬する樣な事項は割愛する。

②P. Pelliot, A propos des Comans（コマンに就て）, J. as., 1920（XV）, 125-185. 所載。

J. Marquart, Ueber das Volkstum der Komanen（コマンの國風に就て）, Abh. k. Ges. Wiss. Göttingen, XIII, 1914, 25-238. 所載。

支那の記錄によつて、①Howorth は九世紀から今日に至る迄の蒙古通史の基礎を築くことが出來た。然し乍ら概して既に研究された所は主として成吉思汗並びにその初期の後繼者等が侵略を行つたり、蒙古帝國を建設した

りした時期に就てである。一八二九年既にP. Bičurin[2]は蒙古の正史—元史の最初の數章を飜譯して居るが、その後同じ資料によつて、成吉思汗の傳記をDouglas[3]氏及びKrause氏が再び譯した。元史より古く十三世紀の中頃に、原(モト)は蒙古語で書かれて居た二つの著述があるが、今日では一二六三年頃出來た支那人の譯文しか遺つて居ない。その一は元朝秘史で、この書物には別に漢字を以て蒙古文の各シラブルの發音を表はした寫本がある。この寫本によつてPozdneev[4]は蒙古語の原文を復原した。他の一は成吉思汗及び窩濶台の遠征(一二〇二—一二四一)の歷史、皇元聖武親征錄である。二つとも希臘教の僧院長Palladius[5]によつて一八六六年及び一八七七年に露西亞語に譯され、更に最近では那珂通世[6]の日本語の飜譯があり、それには重要な略傳も附加へられて居る。これ等の根本資料の外、成吉思汗と同時代の支那の將軍孟珙(一二四四年歿)の手記である蒙韃備錄はVasiliev[7]によつて譯されたし、Bretschneider[8]は西方亞細亞遠征に關する支那の文獻の拔萃を作つて居る。その他の事件で研究されて居るのは次の如きものである。卽ち瓜哇への遠征はGroeneveldt[9]により、十三世紀に賽典赤が雲南を組織したことはVissière[10]氏により、ビルマへの遠征(一二七七—一三〇〇年)はHuber[11]によつて夫々研究されて居り、又東京を暫くの間征服した話は同時代の、支那人と關係のあつた一安南人の小著に書かれて居り——この書物ではこの征服の話が最も主要な部分を占めて居る——Sainson[12]氏の飜譯がある。軍事的遠征の外には研究されたものは殆んど無い。唯行政に就てはこの時代の聖旨の或るものをChavannesとIvanov氏が譯して公にして居る。[13]

註

①H. Howorth, History of the Mongols from the IXth to the XIXth Century, 1876-79.

②P. Hyac. Bičurin, Istorija pervykh četyrekh khanov iz doma Čingisova (成吉思家の最初の四汗の歷史), 1829.

③R.K. Douglas, The life of Jenghiz-Khan (成吉思汗), 1877.

Krause, Cingis Han (成吉思汗), 1922.

④Pozdneev, Transkripcija paleograficeskago teksta Juan-čao-mi-ši (元朝秘史の古文書的原文の轉寫), 1844. (石版)

⑤Palladius, Starinnoe Mongolskoe skazanie o Čingis-

khane(成吉思汗に關する蒙古語の古傳說), Mém. Miss. éccl. russe de Pékin, IV, 1866, 1-259 所載。
Starinnoe Kitajskoe skazanie o Čingis-khane (成吉思汗に關する漢文の古傳說), Publ. Fac. L. orient. Univ. St-Pétersbourg, 1877, 149-266. 所載。

⑥那珂通世、成吉思汗實錄、一九〇七年。

⑦Vasiliev, Istorija i drevnosti vostočnoj časti Srednej Azii (中央亞細亞東部の歷史と遺趾), 216-235.

⑧E. Bretschneider, Notices on the mediaeval geography and history of Central and Western Asia drawn from Chinese and Mongol writings, and compared with the observations of western authors of the Middle-age, J. N. Ch. Br. roy. As. Soc.,1876, 75-307. 所載。

⑨Groeneveldt, The expedition of the Mongols against Java in 1293, Ch. Rev., IV, 246-254. 所載。

⑩A. Vissière, Biographie du Seyyid Edjell d'après le Yuan che (元史による賽典赤の傳記) Mission d'Ollonne, Recherches sur les musulmans chinois, 1911, 25-39 所載。同上 40-49, 93-111, 141-165. 參照

⑪Ed. Huber, La fin de la dynastie de Pagan, ap. Études indo-chinoises, VI, (パガン朝の末路、印度支那研究第六卷附錄) B.E.E.E.O., 1909, 633-680. 所載。

⑫Sainson, Ngann-nânn-tche-luo (安南紀略), 1896.

⑬Chavannes, Inscriptions et pièces de chancellerie chinoises de l'époque mongole (蒙古時代に於ける支那の聖旨碑), Tp., 1904, 357-467; 1905, 1-42; 1908, 297-428. 所載。
Ivanov, Oficijalnyja dokumenty Dynastii Juan na kitajskem jazyke (漢文の元朝公文書), Mém. Soc. imp. russe Archéol. XVII. 所載。

支那史全部を通じてさうである如く、この時代に於ても西方との關係に就ての研究が最も多く現はれて居る。十三世紀並に十四世紀には、高部亞細亞の道は、大汗の宮廷に往來する多數の旅行者、卽ち臣下の諸王、使節、傳導師、商人等の遍歷する所となつた。それは必ずしも知名の士ばかりとは限つて居なかつた。そのことは Rubruquis がカラコルムで識つたといふかの巴里の金銀細工商や、或は又私用で旅する商人達、例へば Balducci Pegolotti の樣な數多のマルコ・ポーロがあつたことでも明かである。そしてこの樣な旅行者には、先づ、あらゆる種類の東洋人があつた。山東の隱栖からオクサス河の畔に居た成吉思汗の所まで呼び寄せられた夫の道士邱處

機①（長春、一二二一—一二二四年）や、最後から二番目の女眞皇帝の使節吾克孫仲端（一二二〇—一二二一年）や、或は旭烈兀のバクダッド奪取を報告すべく蒙古に遣はされた常德（一二五九—一二六〇年）—②Bretschneider がその物語を飜譯して居る—や、更に又、陝西からメソポタミアに來て長老となつた夫の景教の僧—③Chabot 氏がその紀行を譯して居る—の如きがそれなのである。次に、これ等の旅行者には西方人も亦決して尠くなかつた。彼等の手記はずつと以前からその大部分は識られて居て、幾度も版になり、且註釋を附して譯されて居る。Jean Plan de Carpin（一二四五—一二四七年）と Rubruquis（一二五三—一二五四年）のものは④Rockhill が、アルメニヤ王 Hethoum 一世（一二五四年）のものは⑤Klaproth と⑥Bretschneider が、最も有名且重要な Marco Polo のものは⑦Pauthier が（佛蘭西語の原語で）、次で⑦Yule と Cordier（英譯）が、Odoric de Perdenooe（一三一八年）と Jourdain de Séverac（一三二三年）のものは⑧Cordier が、Jean de Cora（一三三〇年頃）のものは⑨Jacquet が譯して居る。以上のものよりもつと短いものでは、Khanbaliq（北京）の司教 Montecorvin の書翰（一三〇五年）、Zaytoun（泉州）の司教 André de Pérouse の書翰（一三二六年）、Marignolli の手記及び Pegolotti の噂話によつて作られた記述（十四世紀の中頃）等が Yule の Cathay and the Way Thither, 1866（H. Cordier の訂正第二版、一九一五—一六年）の中に掲げられて居る。この著の序文は希望峰發見以前の支那歐羅巴間の陸路に於ける關係の綜合的研究を形づくつて居る。

註

①長春の旅行記、西游記は全部 Palladius によつて譯されて居る。Trav. Miss. Eccl. r. Pékin, 1866. 所載。

②Bretschneider, Notes on Chinese mediaeval travellers to the West, Chin. rec, 1874. 所載。（Mediaeval researches from Asiatic sources, 1888 に再び所揭）

③Chabot, Histoire de Mar Jabalaha III, patriarche des Nestoriens ……（景教大長老、マル・ジャバラハ傳）, 1895.

④Rockhill, The journey of William of Rubruquis to the eastern parts of the World (1253-1254), as narrated by himself, with two accounts of the earlier journey of John of Plan de Carpine, 1900. Plan de Carpin の手記は d'Avezac によつて出版され

て居る。Relation des Mongols on Tartares par le Frère Jean du Plan de Carpin（同教の僧、ジャン・ディユ・プラン・ド・カルパンの蒙古或は韃靼手記）……publiée d'après les mss. de Leyde, de Paris, de Londres（レーデ、巴里、倫敦傳導會出版），1838.

⑤Klaproth, Voyage du pieux roi des Arméniens Hethoum auprès de Batou et de Mangou Khan（アルメニア王ヘツームの拔都及び蒙哥汗國への旅行），Nouv. J. as., II, xii(1833) 所載。Argutinskij の露西亞語譯による。

⑥Bretschneider, The journey of Haithon, ap. Notices of the mediaeval travellers, J. N. Ch.-Br. 1876. 所載。

⑦Pauthier, Le Livre de Marco Polo（マルコ・ポーロの書），1865.

Yule, The Book of Sir Marco Polo, 1871, 3rd. ed., Cordier 校訂、1903.

⑧Cordier, Le Voyage en Asie du bienheureux frère Odoric de Perdenone, religieux de Saint-François（聖フランシス派の聖僧オドリック・ド・ペルドノーヌの亞細亞旅行），1891; Les Merveilles de l'Asie par le P. Jourdain Catalani de Sévérac（ジユルダン・ド・セヴエラック著、亞細亞の驚異），1925.

⑨Jacquet, Le Livre du Grand Caan de Jean de Cora（ジャン・ド・コラの大汗國物語）Nouv. J. as., 1830, 57-72. 所載。

基督教徒の旅行者は通りすがりの旅人ばかりであつたわけではなく、中には重要な基督教徒が居たのである。彼等の足跡を①Palladius は見付け出して居り、②Pelliot 氏はそれを更に詳細に明にした。景教の教會は支那に於ては略々唐と共に消滅したけれども、中央亞細亞にはずつと存續して居て、蒙古時代に於ては喀什噶爾、葉爾羌、蘇州、(Kachgar, Yarkand,) 唐克特（Tanchet）の司教區寧夏やカンバリック(Khanbaliq 今の北京）等にその教會があつた。又黃河の北、天德軍(Tenduc) の地方に於て彼等景教徒は有力な地盤を持つて居た。といふのは夫の汪古特族(Ongut)は十二世紀末以來基督教徒になつて居り、更に北方の北部蒙古に於て克烈亦惕族（Kérait）も基督教徒になつて居たからである。中世に於てあんなに擴がつた夫のジャン大司教の傳說が起つたのは此處からであつたのである。この他、同信教徒團は支那の方々の町に存在して居た。それに就て Giles, Moule 兩氏は特に其の中の一つを通報、一九一五年、六二七—六八六頁

所載 Christians at Chên-chiang fu（鎭江府）に於て研究して居る。加特力の傳導師達も、彼等の側から云へばいくらか改宗をして、亦カンバリツク及びザイトン（Khaubaliq 北京、Zaytoun 泉州）に教區を持ち、その他の支那の町々に於て教會を持つて居た。③陳垣氏が言つて居る樣に、支那がその主役を演じて居る所の西洋と極東との交渉はかくの如く絕えず存在して居たのであつた。

蒙古の皇帝の中には西洋の色んな君主と公の關係を有して居た者があつて、彼等の交換した手紙の或るものは現在殘つて居る。④Abel Rémuast は既にこの問題、就中佛蘭西王に關するものに就て研究し、その阿兒渾（阿魯渾）（Arghoun）よりフイリツプ四世に宛てた手紙の一つを公にして居り、⑤Pelliot 氏も亦最近法王廳記錄保存所の記錄の原文によつてこの問題に手を著け始めた。

註

①Palladius, Traces of christianity in Mongolia and China in the XIIIth Century, Chin. rec., 1875, 104-113. 所載。

②Pelliot, Chrétiens d'Asie centrale et d'Extrême-Orient（中央亞細亞及び極東の基督教徒）, Tp, 1914, 623-644. 所載。

③陳垣、元西域人華化考、國學季刊、一九二三年所載。（漢文）。

④Rémusat, Mémoires sur les relations politiques des princes chrétiens et particulièrement des rois de France avec les empereurs mongols（基督教徒君主、特に佛蘭西王と蒙古皇帝との政治的關係の研究）, 1822.

⑤Pelliot, Les Mongols et la Papauté（蒙古人と羅馬法王）, Rev. de l'Orient chrét., III, iii, (XXIII), Nos 1-2(1922-23), p. 3-30. 所載。 Mongols et Papes aux XIIIe et XIVe siècles（十三、四世に於ける蒙古人と羅馬法王）, Comptes rendus Acad, insc. et b.-l. 1922, p. 41, 52-53, 234-235, 268-269. 所載、參照。

五、近代及び現代の支那

十五世紀以降の支那の歷史は、最も多く種々の挿話が取り扱はれた時代の歷史の一つである。①Delamarre 師は通鑑綱目の第三の部分—これは一七三九年に勅命によつて作られた補遺の部分で、明朝に關するものである—の飜譯を始めたが、その半分（一三六八年—一五〇五年迄）しか成就しなかつた。蒙古人放逐のことはどの歷史家も未だ手を着けて居ないが、蒙古人が佛教に改宗した歷史は②Huth によつて西藏語より飜譯されて居る。別に十

七世紀迄の東方の蒙古人に就てはその國の歴史家薩囊小徹辰(Sanang Setsen)の書があり、[3]Schmidt が譯して居る。

註

①Delamarre, Histoire de la dynastie Ming composée au temps de l'Empereur Khian-loung (乾隆帝の時代に編纂された明代の歴史), 1865.

②Huth, Geschichte des Buddhismus in der Mongolei (蒙古佛教史), 1893-94.

③Schmidt, Geschichte der Ostmongolen……verfasst von Ssanang Ssetsen (薩囊小徹辰著、東部蒙古史), 1829.

滿洲人の支那征服に就ては當時既に神父 [1]Martini によつて述べられ、次で次の世紀には神父 de Mailla の書によつて神父 [2]Jouve が物語つて居る。又 [3]John Ross 師は支那の資料によつてその詳細な物語を公にした。征服に就ての赤裸々な劇的エピソード、現場目擊者の語つた楊州の奪取(一六四五年)は [4]Aucourt 氏によつて譯されて居り、又明の沒落、滿洲人の侵略の原因となつた夫の李自成の亂は [5]Khrapovickij 氏によつて、滿洲朝の起源とその種族の發祥地に就ては [6]Gorskij によつて研究された。清といふ國號を採つたこの王朝の正史は存在せず、[7]諸皇帝の實錄は稿本のまゝで遺つて居る。年代記としては官修でないものが唯一つ存在するのみだが、併しそれは古文書の記錄によつて作られたものであつて、十九世紀の後半に學者[8]王先謙が著はした十朝東華錄が卽ちそれである。これは元來一八六一年迄のことを書いてあるのだが、同治帝(一八六二—一八七二年)に就ての百章より成る續篇が附いて居る。一方、公の記錄を編纂したものや軍事的遠征の報告等並びに同樣の私撰の著述の刊行されたものも少くない。十九世紀後半に關するものゝ立派な書目を Pelliot 氏は作つて居る。(B.E.F.E.O., 1903, 686-689)これ等の中研究されたものは唯一つしかない。それは聖武記と題する、清朝の戰役史の短い摘要で一八四二年[9]魏源によつて著はされ、最近 Tchang Tien がその後を承けて一八七五年迄續けた。この書物の或る部分の飜譯や要約は色んな學者によつて試みられて居る。卽ち、Imbault-Huart が一六四八年及び一七八三年の甘肅の回教徒の亂、同光中のツングースの亂、ネパール及びビルマ征服の部分を、Ivanovskij が西藏征服を、

Parker が阿片戰爭の部分を譯した如きがそれである。

註

①Martini, De bello tartarico historia (韃靼戰記), 1654.

②Vojeu de Brunem (Jouve d'Embrun), Histoire de la conquête de la Chine par les Tartares Mancheoux (滿洲韃靼人の支那征服史), 1754.

③Ross, The Manchus or the reigning Dynasty of China, their rise and progress, 1891.

④Aucourt, Journal d'un bourgeois de Yang-tcheou (一楊州人の日記), (1654), B.E.F.E.O., 1907, 297-312. 所載。

⑤Krapovickij, Sobytija pri padenii Mingskoi dinastii (明朝衰亡期に際しての事件), Trav. Miss. écc. russe Pékin, III, 1857. 所載。

⑥Gorskij, Načalo i pervyja dela Mančjurskago doma (滿洲王家の初期の事情に就て), 同上、1852; O načale predhov nynienej dinastii i o nasranijakh Mančjurskago naroda, (清朝の祖先の起源及び滿洲族の組成に就て), 同上、1852.

⑦Aurousseau, B.E.F.E.O., XII (1912), ix, 72-75. 所載。

⑧王先謙はこの著述を編むに當つて實錄館の纂修たる彼の職掌を利用した。この表題は蔣良驥の作つた同樣の年代記、東華錄から借りたもので、この名前は實錄館が北京の東華門の傍に在つた所から來て居る。

⑨Imbault-Huart, Notice sur la vie et les oeuvres de Ouei Yuan (魏源の傳記並びにその著作に就ての小誌), J. as., 1881, 263-267. 所載。飜譯された章節の目錄は Cordier の Bibliotheca Sinica, 632-633. にある。

清朝の初めの二百年間には夫の中央亞細亞征服——これに就ては、①Imbault-Huart が興味ある記錄を集めて居り、又 Maurice Courant 氏は詳細にこの問題を論じて居る——といふ事件以外には殆んど重要な問題は無く、從つてこの期間は從來比較的等閑に附せられて居た。之に反して現代に關する研究は非常に多いのだが、ここには私はその中の最も重要な題目に就て、而もその主なるものをしか擧げることが出來ない。先づ道光帝（一八二一—一八五〇年）の治世は②Gützlaff によつて述べられて居る。その次の咸豐帝（一八五一—一八六一年）の時代に起つた太平天國の大亂は、事件當時いくつかの作品③となつて現はれて居り、その中 North-China Herald, 1858. 所載の Medhurst の論文及び China Mail, 1852-53 所載の Milne の論文には、その數多の記錄の中、叛徒の聖書と云ふべきものが譯されて居るのが面白い。更

に降つて、終りから二番目の皇帝の治世に於ける帝國の行政組織は④Mayers と神父 Hoang とによつて、清朝滅亡直前に於ける文武官吏の採用試驗制度は神父⑤Zi によつて、及びそれ等の改革に就ては⑥Pelliot 氏によつて述べられた。又⑦Bland と Backhouse は西太后慈禧の佛を一部分支那の記錄によつて描き出して居る。康有爲の影響で一八九八年、光緒帝が企てた帝政改革の試みは神父⑧Tobar が譯した公文書を見れば具にその經緯を辿ることが出來やう。又この試みの破局的終末に就ては康有爲の弟子梁啓超が常に活々と描き出して居るが、これは一部分⑨H.Maspero 氏によつて譯された。革命直前の支那は⑩A. Maybon 氏と⑪Ed. Rottach とによつて述べられ、革命そのものは⑫Bland 氏が、より簡潔には⑬Pelliot 氏が述べて居る。廣東革命家の首領孫逸仙の役割は⑭Cantlie 氏が書いて居り、一方皇帝の辭位及び共和國の宣言に關する最も重要な公式記錄は⑮F. Roy 氏が、革命家の綱領は Aucourt 氏が譯して居る。⑯袁世凱のクーデターは彼の死後(一九一六年)直ちに⑰Gain 氏によつて語られた。それ以後の混沌たる無政府戰亂狀態は未だにその終りを告げないのであるが、その中の主な事相をば⑱George Maspero 氏が簡潔に約說して居る。

註

①Imbault-Huart, Recueil de documents sur l'Asie centrale (中央亞細亞に關する記錄集), 1881.
M. Courant, L'Asie centrale aux XVIIe et XVIIIe siècles (十七、八世紀の中央亞細亞), 1912.

②Gützlaff, The life of Taou-Kwang (道光), late Emperor of China, 1851.

③Callery et Yvan, L'insurrection en Chine depuis les origines jusqu'à la prise de Nankin (支那の叛亂、その起りから南京奪取迄), 1858.
Rev. Th. Hamberg, The Chinese rebel chief Hung-siu-tsuen (洪秀全) and the origin of the insurrection in China, 1855.
Lindesay Brine, The Taiping (太平) rebellion in China, 1862. 等。

④Mayers, The Chinese Government, a manual of Chinese titles, 1886.
P. Hoang, Mélanges sur l'administration (行政に關する雜錄), Var. Sin., n° 21, 1903 所載。

⑤P. E. Zi, Pratique des examens littéraires (文官試驗の實際), Var. Sin., n° 5, 1894 ; Pratique des examens militaires en Chine (支那に於ける武官試驗の實際), 同

上、n° 9, 1896.

⑥Pelliot, La réforme des examens littéraires en Chine (支那の文官試驗制度の改革), Bull. Comité Asie franç., 1903, 160–165. 所載°

⑦Bland et Backhouse, China under the Empress Dowager, being the history of the life and times of Tzu Hi (慈禧), 1910.

⑧P. Tobar, Koang-siu et Ts'e-hi, Empereur de Chine et Impératrice douarière (光緒帝と西太后慈禧). Décrets impériaux (聖諭) *1898*, 1900.

⑨H. Maspero, B.E.F.E.O., 1908, 152-258.

⑩Maybon, La politique chinoise, étude sur les doctrines des partis en Chine(支那の政治、支那に於ける諸黨派の主義の研究), *1898-1908* ; La vie secrète de la cour de Chine (支那宮廷秘話), 1910 ; Le mouvement révolutionnaire en Chine (支那の革命運動), l'Action nation., 1909, 574-587. 所載° La République chinoise (支那共和國), 1914.

⑪Rottach, La Chine en révolution (革命の支那), 1914.

⑫Bland, Recent events and present policies in China, 1912.

⑬Pelliot, La Chine et la Révolution (支那とその革命), La Rev. du Foyer, 1912, 403-440. 所載°

⑭J. Cantile et Sh. Jones, Sun Yat-sen (孫逸仙) and the awakening of China, 1912.

⑮Roy, Siuan-t'ong, derniers décrets impériaux (宣統、最後の聖諭) (1er sept. *1911-12* févr. *1912*), 1912. Aucourt, Kö-ming fang lio, plan d'action du parti révolutionnaire chinois (革明方略), Rev. indo-chin., 1911, 407-508. 所載°

⑯Gain, Dans la Chine nouvelle, Études (新しき支那に就ての研究), 1916.

⑰George Maspero, La Chine, 2e éd., 1915.

十九世紀末葉に於ける支那と諸外國との關係の重要問題に關する研究は①Henri Cordier によつて綜括的に行はれ、その後②Robert K. Douglas 卿及び Morse 氏も之に携はつた。別に③Hertslett は支那が承認した諸條約を一九一八年の分迄集めて居る。宣統年間のことは④C.P.Hu 氏によつて研究され、更に⑤Mac Murray 氏は一八九四年より一九一九年に至る期間に亘つて、全ての事柄を再び取り上げて研究した。それ以前の時代では、英吉利との關係に就ては⑥J. Bromley-Eames が、十七世紀前半に於ける露西亞との關係は⑦Badeley が、ペートル大帝時代の事は⑦Gaston Cahen が、亞米利加合衆國との關係は

⑧Latourette 氏が研究して居る。十九世紀の軍事的遠征は諸家の筆を唆つたのであるが、阿片戰爭（一八四〇—四一年）及び東京事件を研究する歴史家は未だ出て居らず、逸話的物語を除けば、前者に就ては Chinese Repository 所載の諸論文、後者に關しては⑨A. Billot の一つの著述があるに止る。併しその他では一八五八年及び一八六〇年の佛英遠征は⑩H. Cordier によつて述べられ、日清戰爭に就て言へば、日本の參謀本部の公式報告が飜譯されて居る。⑪一九〇〇年の事件を巧く一つに纒めることは仲々困難であるが、色々の方面から觀たものは少くない。拳匪の亂は⑫d'Anthouard 氏と Clementy とにより、北京の公使館襲擊は⑬Martin 氏によつて述べられて居るし、⑭Putnam Weales 氏の手紙は言ふに及ばず、當時歐羅巴の諸新聞に現はれた支那に關する多くの論說に至つては眞に枚擧に遑が無い。（未完）

註

①Cordier, Histoire des relations de la Chine et des Puissances occidentales, *1860-1902*（一八六〇—一九〇二年間の支那と西洋列强との關係の歴史）, 1908.

②Douglas, Europe and the Far East, 1904, 2nd ed, 1913.

H. B. Morse, The international relations of the Chinese Empire, *1834-1911*, 1910-18.

③Hertslett, Treaties and tariffs regulating the trade between Great Britain and China and between China and Foreign Powers, 1896.

④C. P. Hu, Treaties…Hsüan t'ung(宣統)period, 1913.

⑤Mac Murray, Treaties and agreements with and concerning China, *1894-1919*, 1921.

⑥Bromley Eames, The English in China, being an account of the intercourse and relations between England and China from the year *1600* to the year *1843*, 1909.

⑦F. Badeley, Russia, Mongolia, China, being some record of the relations between them from the beginning of the XVIIth Century to the death of the Tsar Alexei Mikhailovich, *1602-1676*, 1919.

G. Cahen, Histoire des relations de la Russie avec la Chine sous Pierre le Grand（ピートル大帝時代の露支關係の歴史）, Revue historique, t. XCIV, 1911 所載。

⑧Latourette, The history of early relations between United States and China, *1784-1844*, 1917.

⑨A. Billot, L'affaire du Tonkin（東京事件）, *1882-1885*, s. d.

⑩Cordier, L'expédition de Chine de *1857-58*（一八五七—八年の支那遠征), 1905; L'expédition de Chine de *1860*, 1906.
⑪History of the War between Japan and China, compiled by the Imperial General Staff, and transl. by Major Jikemura and Rev. Arthur Lloyd, 1904.
⑫D'Anthouard, La Chine contre l'étranger: Les Boxeurs（外人に抗する支那拳匪), 1902.
Clementy, The Boxer Rebellion, a political and diplomatical review, 1915.
⑬Martin, The Siege of Peking, China against the world, 1900.
⑭Weales, Indiscreet letters from Peking, 1907.

金石文の辭書編纂方針に就ての一試案

近來支那に於て甲骨文や金石文の研究が盛になるにつれて金石文の文字の形態を示す爲に作られた字引の類は十指に餘る程であるが、それ等はいづれもその檢索の方法が現在の漢字から引く樣に出來て居る。從つて或る金石文の文字を見てそれが現在のどういふ漢字に相當するものかを知らうとする場合には非常に不便であり、終に分らない場合も屢々あるといつた有樣である。蓋し金石文は現行文字の如く畫が一定して居らなかつたり、同じ字でも色々な書き方があつたりして之を組織的に順序立てゝ並べる事が非常に困難な爲に、金石文の方から引ける字引の必要をば誰もが感じて居ながら未だに之を能くしないのであらうと思はれる。そこで私は不完全ながら之に對しての一つの思ひ付きを掲げて見やうと思ふ。それは一口に言へば線のクロス並びに線の端の數によつて金文の字を並べやうといふのである。其原則を箇條書きにすると、一、「型クロスの數、二、丁字型クロスの數、三、十字型クロスの數、四、四つ以上の線の集つて居るクロスの數、五、線の尖端の數（點は一と見做す）六、互に交る所のない線のグループの數。（例へば川といふ字は三つ、回は二つ、弓は一つのグループである）之等の數（一つもない時は〇）を數字で並べて、その數字によつて檢索することは例の四角號瑪等の方法と同樣である。印刷の都合上今假に現代の漢字で例を示すと弓は 600021 忠は 502085 といふ工合である。60021 を 6,21 502085 を 502,85 といふ風に終りの二字だけを，で區切つて0を省いてもいゝと思ふ。勿論この方法では仲々適用の困難な字も出て來るかも知れない。大方の御教示を得て完全な方法に達する事が出來れば幸である。（內藤）